川村学園女子大学研究紀要　第 28 巻　第 3 号　81 頁 – 94 頁　2017 年

幼児教育学生のピアノ演奏技能向上についての考察

松　本　　明*

A Few Practical Teaching Methods to Improve the Piano-Playing Skills of Students Majoring in Early Childhood Education

Akira MATSUMOTO

要　　旨

幼児教育学科における学びの中で，学生たちが感じる悩みにピアノ演奏技能が挙げられることが多い。元来ピアノ演奏が得意であり好きだという学生もいるがそれは少数で，大多数は苦手意識をもっているのである。幼児の教育を専門的に学び，将来は幼稚園教諭として現場で幼児教育に携わる教育者になろうとしている学生にとって，他にも学ぶべき科目は多く予習準備に充てる時間にも制約がある。本学入学前に全くピアノを学んだことのない学生も相当数存在する。そしてピアノ演奏技能については大学入学後に本格的に学習を開始し，「音楽Ⅰ」「ピアノ演習」「音楽Ⅱ」の単位取得を通して技能を身に付けようとするのだがこの年齢になって始めるのは子供の時から学習しているのとは違ういろいろな困難さが少なからず存在する。この傾向は，我が国で学ぶ幼児教育学生の現状であるといってもよいだろう。そのため幼児教育学生向けのピアノ教則本も出版されている。さらに幼稚園の現場ではただピアノ演奏技能だけが求められるだけでなく，幼児の嗜好に合う楽曲をピアノで弾きながら，歌唱しなくてはならなくなる。幼稚園教諭にとって必須となるピアノ演奏技能の向上を目的としその一助となるべくピアノ演奏を認知の面からも検証し，学生一人一人個々のニーズに沿う学び方を示すことを目標とする。そして個々の問題点を解決する具体的方法を提示する。

キーワード：音楽，ピアノ演奏技能，幼稚園教員養成，認知，ブルグミュラー

1　はじめに

本学幼児教育学科で学ぶ学生（以後，幼教学生とする。）は，必修教科「音楽Ⅰ」の授業において保育者として適した初級から上級までのピアノの基本的技術の習得を目指している。教材としては難易度順に易しい方からバイエル・ブルグミュラー・ソナチネアルバムの順序で用

*非常勤講師　芸術学（器楽ピアノ）

いられる。そして幼児の歌を弾き歌い（ピアノ伴奏を弾きながら歌唱する）ができうるに足るピアノ技能を身に付けることが求められている。弾き歌いは，歌うことと弾くことを同時にこなさなくてはならないのでかなり難しい。よってかなりのピアノの技量が必要とされる。具体的に言えばソナチネアルバムをこなせる程度の力が必要であるといえる。大学に入学して初めてピアノを学び始める学生にとってはピアノ演奏技能を習得することはとても難しい課題になっている。その現状に接して，筆者はピアノを専門に指導する立場から，何らかの有用な方法を考案し，実践すべきだと考えるようになった。

十代半ばの少年少女が見事にピアノを演奏するのを見るとピアノを弾くことは一見簡単な事だと思われるかもしれない。しかし他の楽器例えばヴァイオリンやフルートなどと比較してもピアノは上達に時間のかかるものなのである。例えば優秀な子供が楽器を初めて演奏家のレヴェルに達するまでの最短の年数の目安はフルートは5年，ヴァイオリンは10年だがピアノは15年かかる。これほどにピアノの技術を身に付けるのは時間がかかるのである。幼児の好む童謡を弾き歌いできる程度で良いのだからと安易に考えてはいられないのである。

ピアノ固有の難しさについて考えてみたい。管楽器や弦楽器は例外はあっても基本的には単旋律を扱う。即ち一つのメロディーを奏でるわけである。しかしピアノは，右手と左手を同時に全く別の動きをしなくてはならないし，さらに片方の手で最高五つの音をつかみ取るのである。各々の手で二つの旋律を扱わなければならないこともしばしばある。計四つの旋律を同時に一人の人間が奏でなければならないことも出てくるのである。一人4役である。同時に読譜も複雑になってしまうのでますます困難さを実感することとなる。

現状の把握を詳細に行うため平成28年7月下旬，その前年度「音楽Ⅰ」を履修した30人の幼教学生に記名方式で記述形式アンケートの回答を依頼した。その結果について，名前の公表をしないこと，個人を特定できる記述をしないこと，成績評価への影響は皆無であること，そして利用目的を学術研究に限ることを条件に全員から書面で使用許可を得た。

2　事前調査

2－1　保育従事者の置かれている現状の調査

我が国では，文部科学省の施策に基づいて教育計画がおこなわれている。現在は幼小連絡会というものがあり，就学前の幼児を小学校入学に際し滞りがないように綿密な打ち合わせをすることを奨励している。幼児教育は小学校入学前の前段階として近年特に重要視されてきていると考えられる。保育学生にとっての社会における期待度は高まっているのが現状といえ

よう。

2－1－1　幼稚園と保育園

小学校に入学する我が国の学齢児童は，幼稚園出身と保育園出身の２つに大別される。稀に在家庭児がいるのだが最近では非常に少ない。各家庭の事情にもよるが，就学前の幼児は一般的にみて何らかの形で教育機関（幼稚園）または児童福祉施設（保育園）に通い小学校入学までの準備をしていることがわかる。

主要教育指標の国際比較をみておく。（清水一彦他著『最新教育データブック』p.p. 242 から引用）日本・アメリカ合衆国・イギリス・フランス・ドイツの就学前教育の在籍率を比較しておく。在籍率とは，就学前教育在籍者数を該当年齢人口で割ったものである。日本では，3 歳児 70.3％，4 歳児 93.0％，5 歳児 96.6％である。アメリカ合衆国では，3 歳児 38.6％，4 歳児 66.4％，5 歳児 86.7％で日本よりやや少ない。イギリスでは，3 歳児 42.0％，4 歳児 85.0％でアメリカ合衆国とならんでいる。ドイツでは，3 歳児 58.1％，4 歳児 86.6％，5 歳児 88.9％となっている。それに対してフランスでは，3 歳児，4 歳児，5 歳児すべて 100％であった。（引用おわり）どの国々でも就学前教育には関心が高く，養育者にとって幼児教育は不可欠なのがわかった。

次に我が国の幼稚園と保育園でおこなわれている音楽教育の現状をみていく。

2－1－2　幼稚園における音楽教育

幼稚園は文部科学省の管轄である。このことは保育園とは全く違った教育システムによって幼児教育が進められていると考えなくてはならないところである。

幼稚園は，3 歳から小学校入学までの幼児を入園させて教育を行う機関である。我が国では教育基本法（平成 18 年 12 月 25 日　改正）に示されている目的，及び内容に基づいて幼稚園・小学校・中学校・高校の段階にわかれて国の教育方針が体系的に成り立っている。

学校教育の起点となる幼稚園では，幼稚園教育要領（平成 20 年改訂，平成 19 年の学校教育法の改訂などを踏まえている）によって教育課程が決定される。そのなかの「ねらい」及び「内容」については５つの領域にわかれている。

＜健　　康＞　健康な心と体を育て，自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う。
＜人間関係＞　他の人々と親しみ，支えあって生活するために，自立心を育て，人とかかわる力を養う。

＜環　　境＞　周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

＜言　　葉＞　経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し，相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て，言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

＜表　　現＞　感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。

以上５つの領域のなかで音楽教育の内容が記載されているのは＜表現＞のなかに多数含まれており，改訂以前の（6. 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器をつかったり楽しさを味わう。）一項目のみであった音楽教育に関する内容は以下のように改訂されている。

(1) 生活の中で様々な音，色，形，手触り，動きなどに気付いたり，感じたりするなどして楽しむ。
(2) ＊＊＊＊＊（略）
(3) 感じたこと，考えたことなどを音や動きなどで表現したり，自由にかいたり，つくったりなどする。
(4) ＊＊＊＊＊（略）
(5) 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
(6) ＊＊＊＊＊（略）
(7) ＊＊＊＊＊（略）

音という単語にのみ焦点を絞り込んだのだが，音楽に関する内容が増えていることがわかる。このことは幼児に係る教育において音楽の重要性を認められていると考えてよい。保育学生にとってはピアノ演奏技能習得の必要性を再確認することになるだろう。

２－１－３　保育園における音楽

保育園は厚生労働省の管轄である。また，保育園（所）は児童福祉法に基づき保育に欠ける乳幼児を保育することを目的とする児童福祉施設となっている。保育園は家庭の事情により，乳幼児の保育を長く受け持つこととなり子育てを支援する社会的役割がある。養護と教育が一体になっている保育園では，「保育所保育指針」（平成20年４月改訂）によって運営されている。

そのなかで

第３章　保育の内容

1. 保育のねらい及び内容

(2) 教育に関わるねらい及び内容

オ表現項目

（イ）内容のなかで第８項目に「幼稚園教育要領」の文言と同一のものがある。

⑧音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。

保育園では０歳児からの養育も加わり，保育内容について細分化されている。割愛するが幼稚園教育要領にも掲載されていた５つの領域は，保育所保育指針にも酷似したものが掲載されている。この点において共通になっていることは，監督官庁が違うにも関わらず我が国の幼児に対す教育内容が同一の方向で統一されていると考えてよいし，小学校に入学してくる児童を等しく教育することを目指している。小学校教育への円滑な継続性が規定されているのである。

２－２　幼稚園・保育園における音楽教育の調査

筆者は現場で仕事をする幼児教育に携わっている人たちの現状を知っておきたいと考え，筆者が在住する所沢市で口頭の調査を行った。保育学生にとって歌唱指導を行う際のピアノ演奏技能について，現場で行われている音楽教育の現状を知ることはやはり大切なことだと考えたのが理由である。設問内容は，毎日の様子を中心にしたものとした。先方の勤務時間内のなかでのことだったので負担をかけないことに配慮して設問数は少なくした。

［設問］1. 毎日，歌をうたいますか？（何分くらい，何回くらい）

2. 音楽にあわせて踊りますか？ 子どもたちの喜ぶ音楽は何ですか？

3. 音源にはピアノなどの楽器を使用しますか？

２－２－１　幼稚園教諭にきく音楽教育

在住している市では多くの幼稚園があった。私立の幼稚園も多くありそれぞれ特色ある教育に熱心に取り組んでおり地域の住民からも支持されていたが，ここでは公立幼稚園での一般的な教育に視点をあてた。（平成 20 年７月 20 日，調査協力は所沢市立第二幼稚園である）

アンケート調査１の設問では，クラスの意識付けのために歌をうたう。また，絵を描く場合，

お弁当を食べる場合，お帰りの場面などの生活のなかに歌が用いられているとの回答が得られた。このことは歌，即ち音楽が動機付けの役割をしており，生活の場面設定において切り替える役割を担っていることがわかる。幼児は歌をうたいながら，音楽をききながら次のやらなくてはならない場面（作業）を生活のなかで覚え行くことになる。時計というものではなく，時間の概念を養うことに歌うことが利用されていた。

２の設問では，音楽をききながら場面を想像して身体表現をさせていると回答を得た。例えば，海を泳ぐ魚になってみる等である。運動会などのお遊戯にも有効とのことであった。

３の設問では，ピアノの演奏は苦手であると回答があった。しかし，幼稚園児はピアノの生の音に敏感に反応し嬉しそうにしてくれるので伴奏には力をいれている。必要な時には必ず演奏するとあった。

２－２－２　保育園保育士にきく音楽教育

公立保育園でも同様の内容の調査をした。（平成 20 年５月１日，調査協力は所沢市立山口保育園である）

３つの設問においての回答は幼稚園とあまり差があるようには感じられなかったが，一日の保育時間が長く，日常での生活面の規則正しさが求められるために時間に厳しく，保育園では特に躾の部分に音楽が用いられている。お昼寝や食事の時間の注意喚起のために使用されているのである。そして，遊びを基調としながらもリトミックなどの音楽教育に力をいれていることがわかった。この傾向は社会的背景から家のなかで過ごすことが多くなり，幼児の外遊びの時間が減少して身体を動かす機会が少なくなったことが考えられる。外遊びの代替としてのリトミックである。

以上保育従事者の現場での音楽教育に関する指導内容を調査してみたが，ピアノ演奏の技術はとても重要な部分を占めていることがわかった。特に，音楽によって行動する動機付けを受けている幼児の様子からみると CD などの音源から聞く音と，生の音では瞬時に反応する速度に影響が表れてくるのは非常に興味深い結果といえよう。

保育学生のピアノ演奏技能の習得は必須となってくる。

3　現状の把握

3－1　幼稚園教員養成の現在

本学幼児教育学科では，「音楽Ⅰ」を受講する学生においてはピアノ演奏技能の習得，及び幼児の歌を歌唱する能力の獲得の二本柱で講義は進行する。ピアノ演奏に必要な技能的知識の習得や音楽に関する基礎的な知識の習得も目的としている。

講義ではピアノの演奏法習得にあたり，バイエル・ブルグミュラー・ソナチネアルバムなどの教則本を使用してピアノの演奏の技術向上に役立てている。これらの教則本は戦後の我が国では非常に一般的なものであり歴史を経ているものであるから質は高い。特にブルグミュラーは読譜の訓練に適しているし，ソナチネアルバムには古典の名曲が数多く収録されている。指の動きの訓練，読譜の訓練，音楽知識の涵養に役立つバランスの取れた教材である。幼稚園教諭の採用試験でもこれらの曲が課題曲として課されることがほとんどである。楽曲一つ一つが独立したものになっており，演奏者にはわかりやすく学ぶことできる。そして個人の進度にあった楽曲を選ぶことで自分自身の上達を感じられることはピアノ演奏の技術習得に適していると考えられる。

3－2　アンケート調査について

学生一人一人の個性を大事にしながら問題点を浮き彫りにする必要性から，ピアノに関わる項目についてのアンケート調査を実施したいと考えた。演奏技術面での向上の判断はとても微妙な部分があり，数値化することは非常に難しい。しかし個人に適した技術の向上を目指す場合には一人一人の抱えている問題箇所を明確に把握する必要があるとも考えた。

アンケート調査の結果は研究目的以外には使用しないことを伝え「音楽Ⅰ」の履修を終了した幼教学生 30 名に対して記名式で実施した。（平成 28 年 7 月下旬）それぞれの学生個人の成長過程を観察することを念頭に置き記名式とした。

アンケートの質問内容は大きく分類して 3 つに絞った。①大学入学前のピアノ学習歴②高校在学中までの普通学校教育課程の音楽科授業における音楽的知識の習得状況③現在，楽曲を仕上げるまでのピアノの練習方法につての手順。

それぞれの設問の質問側の意図としては

① 個人の音楽歴を知るためである。

② 現代の我が国における公教育の現場での音楽教育について知り，それが保育学生にとってどれだけの音楽の素養として備わっているのかを知るためである。

③ 音楽的知識が蓄積されたことを踏まえてどのような方法でピアノを練習し，楽曲を仕上げているかを見極めることとした。

アンケートは30名全員から回答を得た。実際の幼教学生にとってピアノ演奏をどのように感じているのかも回答を通してみえてくるものがあった。①の質問で，大学入学前にピアノなどの鍵盤楽器を習う経験が有りと回答した学生は18名であった。そのうちの多数が音楽教室に通ったことがあると回答した。習い始めた時期は，およそ3・4・5歳からが多く10名であった。残りの8名も10歳からが1名で他7名は小学校入学後まもなく習いはじめている。

この18名の学生のうち現在まで継続して習い続けていると回答したのは4名である。大学入学後は大学での講義を受けるので個人的なレッスンを止めたと回答したのは2名であった。就学前からピアノを習いはじめて2年くらいでやめたと回答したのが1名であったが，およそ中学校入学前後まで継続したと11名が回答した。このことから，経験年数は最低でも2年，4年から6年が5名であり10年以上ピアノを習っている学生も2人いた。以上の結果からみても学生一人一人の能力にはばらつきがあり，それぞれに応じた指導をすることの必要性が高いことがわかった。

次に①で大学入学前にピアノを習ったことがないと回答したのは12名である。全くピアノ演奏の経験が無いということは，楽譜を読む読譜力を習得する初歩の段階からピアノ演奏の技能を学ぶこととなる。「音楽Ⅰ」を受講する幼教学生のうち約3分の1が初心者ということである。このことからも，ピアノ演奏技術の習得は個に応じたものであることが重要になってくることがわかる。

3－3　検証

大学入学前まで全くピアノの練習をしたことがないと回答した12名の学生に別の視点からの音楽歴を質問した。我が国の公教育における音楽科教育は，世界的にみても充実しているとされる。小学校入学前の幼児の時期から音楽に触れることを情操教育の一環としてとらえていることからみても，それに加えて公教育に音楽科を置き高校までの教育課程まで組み込まれているのは特筆すべきことである。

高校において芸術科目として音楽科以外を選択した学生は8名であった。小学校から高校までの音楽科の授業において音楽的基礎知識（リズム，拍子，音階及び音の名称など）を習った記憶が無いと回答したのは1名であった。リズム即ち音符の種類を習わなかったとするのは8名で，音の高さを習わなかったとの回答は上記の1名以外はいなかった。このことは，我が国の初等中等の音楽科教育を受けたのであれば，リズムはあまり理解してなくても，音に関して

は一応の理解はできていると考えられる。ピアノ演奏の経験値が低いとしても音楽的知識の習得においてはあまり時間をかけなくても理解度は上がりやすいとみてよいであろう。ピアノ演奏技術習得前の音楽的知識の有無はとても重要である。大学入学後の 2，3 年でのピアノ演奏の向上はこの基礎知識のうえに成り立っているといってもよい。

楽譜を読む能力がない人がインターネット等で音源を聞いてピアノの鍵盤を探りながら音を拾っていく方法も今日では一部には見聞きもするが，悪い方法である。この方法では読譜に何倍もの時間がかかり，少なくとも数十曲に及ぶ幼児のための弾き歌い曲の伴奏ピアノを習得するのは無理である。また採用試験としての課題は必ず譜面で渡されるため，その場で自分の読譜力で対応できなければ試験さえ受けられなくなるのである。確実な読譜力を身に付けることは必須である。

ピアノ演奏の技術の向上を目指しできるだけ短い時間で習得するためには，弾くことだけに着目するのではなく楽譜を読むこと即ち読譜力の習得にも重きを置くことが大切であろう。

4　実践的なアプローチ

4－1　認知の側面からのアプローチ

『MI：個性を生かす多重知能の理論』の著者であるハワード・ガードナーはその著書のなかで次のように序文で述べている。

> ～「教育方法が効果的であるためには，二つの要因が必要です。一つは，確固たる科学的根拠にもとづいていることです。（略）人はみな，いくつかの別々の知能をもっていて，一人一人が，それらの知能をまったく個人的なやり方で組み合わせているのです。」～（p.p. ⅱ）

ガードナーによれば人間はいろいろな種類の知能を持っておりそれを必要に応じて組み合わせることで生活の多種多様な場面に適応させることを意識的または無意識に行っているという。また「音楽の演奏の領域では，身体的運動的知能や，個人的 [対人的・内省的] 知能，音楽的知能が関係する」（p.p. 116）としている。ここでの身体的運動的知能とは，ピアノ演奏の指，手首，腕，体全体の動きと考えられる。個人的知能はピアノ演奏を可能にするまでの個人的な練習方法で各個人が描く楽曲に対するイメージ作りを果たすと考えられる。音楽的知能とは音楽的知識すなわち読譜力，ピッチやハーモニーへの感性等である。

身体的運動的知能について，ピアノの演奏においては初学者と既修者の能力差が大きいと考えられる。しかしそれ以外の個人的知能や音楽的知能を駆使して足りないところを補うことが

可能となりうる。個人的知能，音楽的知能ともに後天的訓練が可能なものであるから，幼教学生や大人の初学者にも希望が持てるということにもなる。「ピアノは子供のうちから始めないと無理である」とよく言われるがそうとは言い切れない論拠を示しているといえよう。

個人的な知能のうちの対人的知能とは「他人の意図や動機づけ，欲求を理解して，その結果，他人とうまくやっていく能力」（p.p. 60）とある。まさに教員に求められる能力といえよう。

内省的知能，（ガードナーによれば）「自分自身を理解する能力であり自己の効果的作業モデルを持ちそのような情報を自分の生活を統制するために効果的に用いることのできる能力」（p.p. 60）について検証する。30 人全員について楽曲を仕上げていく際の過程をきいた。両手で演奏することを要求されるピアノを，どのように練習をしているかということである。一般的に唱歌の伴奏においては高音域で演奏する右手が旋律パートを弾き，低音域で演奏する左手が伴奏パートを弾くように作曲されている楽曲が多い。バイエル・ブルグミュラー・ソナチネアルバムの教則本においてもその傾向にある。学生へのアンケートでは，「両手ですぐに練習を始める」が 5 名，「右手から」が 24 名，「左手から」が 1 名であった。総じて両手での演奏をすぐに試みているのは経験値の高い学生であることがわかった。しかし経験値の高くはない学生が，自分自身の能力を理解して片手ずつの練習方法を自発的に選択しているところに着目したい。筆者は講義においてこのことは助言しておらず，これはあくまで学生自身の自発的な行動である。これはまさしくガードナーがいうところの内省的知能による行為とみなすことができよう。

楽曲を仕上げる行為は建物を建てることによく例えられる。左手部分が伴奏パートであることが多いので，楽曲の和声進行をつくり土台となっている。その上に右手部分となるメロディー（旋律）が乗ることになり音楽は聴覚に働きかけることができるのである。

後述するが，演奏技術の向上には右，左それぞれ片手ずつを繰り返し練習する方法がもっともよい方法なのである。この方法を自発的にとることのできた学生が多く存在したことは内省的知能発達の良い証左となろう。付け加えれば，細分化された部分的運動を伴う形で記憶していくことはメタ認知の構築をしていくこととともなり，記憶が定着することでスムーズに演奏することにつながるとも考えられる。

4－2　実技演奏の側面からのアプローチ

実際の講義では，学生全員の演奏を聴いた後ピアノ技術向上のための指導を行ってきた。時間の制約はあるが，一人一人のニーズにあった指導が必要であり，繰り返し時間の許す限り何回でも演奏を聴き指導するようにしている。学生が自分自身の演奏をフィードバックさせなが

ら技術の向上を目指しているからである。繰り返すことが大切なのである。一人一人が固有の様々な問題点を抱えている。しかしながら，どの学生にも同様に起こりうる演奏上の問題点があることも事実である。ここでは，その部分に焦点をあてて実技面からのアプローチを試みていく。

4－2－1　楽譜を読むことと演奏すること

ピアノを演奏するにはまず楽譜に書かれていることを読み取らなければならない。これを読譜と呼ぶが，大学入学時にこれができないまたは不得手な学生が多い。アンケートによれば小中学校の音楽の授業においてほぼ7割が音の高さとリズムの両方を習ったと答えているが実際に正しく読譜ができているかというとなかなかそうは言い難い。

第一の問題点はピアノの譜表である大譜表について，その真ん中のドの音がピアノの中央のドであるという最も基本的な認識ができていないことである。よって音が読めていてもその音がピアノの鍵盤上どこの高さの音であるかわからないというケースがしばしばみられる。また ト音記号は読めるがヘ音記号を読むのに非常に時間がかかる傾向はほとんどすべてにみられる。歌唱はほとんどすべての場合ト音記号で書かれているので，小中学校において生徒は親しむことができるがヘ音記号ではそれが当たらないというのが理由であろう。

次にリズムについてである。歌唱のピアノ伴奏においては多くの場合様々なリズム的装飾が行われるため付点，複付点，3連音等の表記が頻繁に表れる。一番単純な付点のリズムは理解できるがそれ以外は理解できていない場合が多い。

こうしてみると読譜というものは複雑で面倒で困難なものと思われる向きもあるかもしれないが，読譜すなわち音の高さと長さ（リズム）の表現は全く曖昧さのない100％理詰めのものなのである。大譜表のすべての音がピアノの88の鍵盤と1対1で対応しているのでそれぞれの位置を一つずつ覚えればよいのである。88は一見多いように見えるが一般的に使用される鍵盤は中央寄りの40ほどである。初学者がよくやる予習として音符の上にカタカナで階名（ドレミ）をふることがあるがこれをやっていてはいつまでも覚えられないし学習する曲すべてにそれをするには莫大な時間もかかり非常に不経済であるから是非やめるべきである。

リズムについては覚える事柄はもっと少ない。全音符，2分音符，4分音符，8分音符，16分音符とそれに対応する休符の計10種類。加えて本来の音価を5割増しとする付点の原理，拍を3等分する3連音，これで全部である。先ずはこれを完璧に論理的に理解することが必須であると言える。

このように読譜のために覚えなければいけない事柄は50ほどで多くはない。ひらがなの数

とほぼ同じである。ではなぜそれを覚えた初学者がその後も読譜で苦労し続けるのか？ それはピアノ演奏においてはその知識を瞬時に働かせ反応する必要があることによる。1秒ないし2秒考えて答えを出していては遅く，小数点以下の速さが求められるのである。これは継続的な訓練によってしか得ることができない。よって学習の初期段階では一つでも多く音符を読むことが大切なので曲の仕上がりが不完全であっても1曲でも多く手掛けることが必要である。これを繰り返せば早いケースで4週間遅くても8週間で効果が表れた。

4－2－2　拍節への意識を身に付ける

拍節とはその楽曲が何の音符で幾つを打つことで1小節を構成するかということで，例えば4分の4拍子であれば4分音符4つ，8分の6拍子であれば8分音符6つということになる。これは楽曲の最初，音部記号（ト音記号とヘ音記号）の次に必ず記載されている。これはその楽曲がどのような音楽であるかを表す最も重要な要素であるのに看過されることが多い。これは1小節の時間的な長さを確定するものであり変更の指定がない限りそれはそのまま継続される。つまり一拍目は同じ時間的周期で現れるのである。これがその拍子独自の律動を生みだすこととなる。またリズムを読み取る場合も全体量がこれだけであるから，そこから引き算で残った部分を類推していくこともしばしば行われる。つまり小節を前から数えていくのではなく後ろから数えていく方法である。

4－2－3　弾き歌いにも役立つ声を出しての拍数え

拍節への意識を身に付けるために最も効果的な方法は弾きながら同時に声を出して拍を数えることである。4分の4拍子では，イチトーニートーサントーシートー，こうすれば1小節を8等分することになり8分音符まで対応できる。16分音符に対応するためには，イチトオニイトオサントオシイトオと16音節に対応させるのである。これによって小節内のリズムは完全に理解されうるし，もしこれに合致しない場合は自分の理解に誤りがあることを気が付くことができる有用な練習法である。弾くことだけでも簡単ではないのに同時に声を出すのは難しいことである。しかし歌唱の弾き歌いが目的であるから弾くことと声を出すことの両立は必須である。この練習は弾き歌いの予備練習としても有効である。

4－2－4　片手ずつの練習

ピアノを演奏するうえでの難しさは左右で異なった指の動きをしなければならないことにある。異なった動きとはつかみ取る音，音の上下する方向，左右の叩くリズム，これらすべてが

多くの場合左右で異なるわけである。これをいきなり両手で取り掛かるのは大変なことである。そこで片手ずつ個別に練習を繰り返し，頭と手のそれぞれに記憶を植え付けるのである。その手順を踏んだのち，よりゆっくりとしたテンポで両手を合わせていくのである（アンケートによれば洞察力に優れた学生は自発的にこの方法をとっていた）。この練習方法の更なる効用としては左手の確実性を増すことができることにある。弾き歌いの伴奏ピアノとしては大抵の場合右手は歌唱と同じメロディーであり，左手に本来の意味での伴奏形がおかれている。幼稚園での実践の場合歌唱は園児が歌っているのだからピアノの大切な役目はそれに対置する伴奏形，即ち左手を確実に演奏することである。右手は園児の歌唱を導くものとして大切な要素であり過小に評価するつもりは全くないが楽曲の完成という観点からはやはり左手の重要度は高いのである。アンケートにおいても「左手が思うように動かない」と答えた学生は8割に上った。これは左手が利き腕でないことに起因していると推測される。これもまた左手だけの十分な練習の必要性をあらわしている。

4－2－5　メトロノームの活用でテンポを上げる

アンケートによればピアノ学習の悩みについて，読譜の難しさとともに最も多かったのが自分の取り組んでいる楽曲のテンポが上がらないということであった。取り組んでいる楽曲に対して理想とするテンポをイメージできていることは大変良いことである。しかし理想と現実の乖離に苦しむことにもなるわけである。テンポを上げようとしても肩，腕，手首が固くなりますます指が動かなくなることが多い。ここから抜け出す方法としては，まずは体全体をリラックスさせて弾けるテンポ，多くの場合は非常にゆっくりと始め，徐々にメトロノームの数値をあげていく。これを焦らずに時間をかけて繰り返し行う。一度ゆっくりとしたテンポで正確に弾くことを完成させたなら，あとは回数を重ねれば必ずテンポは上げられるのである。しかし一足飛びに上げようとすると再び肩，腕，手首が固くなってしまう状態が戻ってしまう。ごく僅かに少しずつ速くしていくことが大切である。これをコントロールするためにメトロノームの使用は有効である。

5. ま と め

ピアノの技術向上に関してできるだけ具体的に記述し，有益なものとなるように努めた。始めるのが遅くても希望が持てるという論拠も示した。進歩が実感できれば苦しい練習も少しは耐えられるのではないかと思いできるだけ無駄な方法は省くことにも注力した。幼稚園児が生

の音を聞くと喜んで明らかに反応が違ってくるということを心に留め置いて努力を継続してほしいと思う。それでも練習は苦痛なものである。学生へのアンケートにおいても「課題が毎週新しくなり準備が大変で苦労している」という不満も多く出た。前述したとおり 4 週間から 8 週間で読譜ができるようになると不満は解消されていったが，これを乗り越えられるかどうかが大きな問題となる。乗り越えられなければピアノの上達をあきらめてしまうということも起こりうるのである。不満は看過されるべきではないしピアノを嫌いになってもらいたくない。この問題を解決する何らかのメソードの開発を今後の課題とするつもりである。

引用文献

清水一彦他（2006）．最新教育データブック第 11 版（株）時事通信社　p. 242.

ハワード・ガードナー　松村暢隆訳（2013）．MI：個性を生かす多重知能の理論　新曜社　p. 序文 ii・p. 60・p. 116

文部科学省　幼稚園教育要領　文部科学省平成 21 年 4 月 1 日施行　p. 3　p. 9　http://ba-boo.jp/hoikushishin/youchien

厚生労働省　保育所保育指針 厚生労働省平成 21 年 4 月 1 日適用　p. 21　http:ba.boo.jp//hoikushishin/contact

参考文献

G. コーエン　川口潤訳（1995）．日常記憶の心理学　サイエンス社

S. ケシェル　佐藤正行訳（2016）．音楽と脳科学　北大路書房

日本ダルクローズ音楽教育学会編（2015）．リトミック教育研究　―理論と実践の調和を目指して―日本ダルクローズ音楽教育学会創立 40 周年記念論集

謝　　辞

アンケートに快く協力くださった川村学園女子大学教育学部幼児教育学科の学生各位に謹んでお礼申し上げます。